

「熊本キリシタン年表」作成によせて

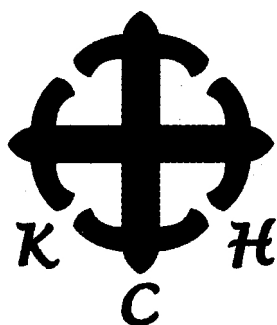
花岡, 興史
熊本キリシタン史研究会 : 理事

<https://hdl.handle.net/2324/4772332>

出版情報 : 熊本キリシタン史年表 (稿) , pp.1-26, 2010. 熊本キリシタン史研究会
バージョン :
権利関係 :



熊本キリシタン史年表(稿)



熊本キリシタン史研究会編

2010年

「熊本キリシタン年表」作成によせて

熊本キリシタン史研究会理事
花岡 興史

はじめに

歴史を学ぶ上で、時間軸を的確に理解することは不可避である。ある事象が、どのようなことに起因するのか、またどのような時代背景により起こりえたのかなどの理解は、時間軸により明快になることも多い。よく「歴史は流れで理解する」と言われるのはこのことである。その理解を助けるものは年表である。

現在、熊本キリシタン研究会では、キリシタン史を時間軸で捉えることを目的として、「熊本キリシタン年表」の作成を試みている。

年表そのものは、今まで多く出されており、熊本の歴史だけを見ても少なくはない。例えば、近世史の領域では、『熊本藩年表稿』(※)があり、出典を明確にした良書であるといえる。しかし、こと熊本のキリシタン史に限れば、目立つものは僅少である。

この年表を作成するにあたり目標とした点、留意した点、今後の展望（いわゆる解題）を以下に記したい。

(※) 細川藩政史研究会編『熊本藩年表稿』1974

「熊本キリシタン年表」について

近年の熊本のキリシタン研究は、知見の範囲では、本格的に上妻博之氏が1939年に「細川藩之切支丹」(※1)を編述したことに始まる。その後、多くの研究が現在までなされているが、熊本のキリシタン史としての体系的なものは、一部を除いて少ないといえる。現在の熊本県と、近世の肥後細川藩との「行政範囲」の異なりが、そのまま研究上においても地域性をもたらしていることが大部分の理由であろう。

それは、既に、上妻氏の編述とほぼ同時期の1941年に、下田曲水氏により『暫定天草切支丹史』（※2）と題した書籍が発刊されており、巻末に「天草切支丹年表」と題する年表が収録されている。研究の草創期から、あえて「天草」と冠されていたことから地域性を感じとることができる。

ただ、下田氏もこの「天草切支丹年表」には満足しておらず、次のように述べ、地域性脱却の困難さをあらわしている。

「当初の予定としては我が天草切支丹の背景として全国及び肥後本土の年表も併載し三様の年表を示さんとする希望で遭ったが、自ら満足し得る程度に至らずして、刊行は急がねばならぬ事情に迫られて、遺憾ながら当の天草だけに止めて了つたのである。但しこれとても甚だ杜撰なるを免かれぬことは勿論である」

熊本キリシタン史研究会は、このような研究上の地域性から脱却することを目標の一つにしている。つまり、地域性に配慮しながらも、より広範囲な視座に立つことを基本としている。その基礎資料となるものが、今回の「熊本キリシタン年表」（以下「年表」）である。

「年表」は、会員である川本實氏により作成されたものを底本としている。フロイス、パジェスという外国人の記述を根拠にしていることが大きな特徴である。つまり、「年表」は、「外国人の記述によるキリシタン年表」なのである。記述内容、表現方法が、従来の年表とは趣きを異にするものであることは、一見で理解できるであろう。自らもクリスチャンである川本氏のこの視点は、著者のように、受洗者でないものからみると、新鮮な輝きを持つものである。

この「年表」に対して、川本氏と熊本キリシタン史研究会の要望があり、若干補訂させていただいた。年表の作成は、史料からの拾い出しをひとつひとつ重ねていく非常に地味な作業である。会員諸氏には、この作業が、多くの時間を必要としながらも、未完であり続けることを容易に理解していただけるであろう。

前述の下田氏も「年表作成に就てこれまで既に郷土史家若くは篤学の人々に依って研究されたところを中心として初年代と史実とを編成しては見たが、これを以て充分だと認むるに足るべき天草切支丹年表とすることは固より不可能である」と年表作成の困難さを述べている。

しかし、ある段階で誰かが公表しなければ、年表としての一般性は永遠に生まれない。このような意味でも「年表」作成された川本

氏の労苦を看取できる。今後は、基礎資料である「年表」を供覧し、会員諸氏のご教授をいただきながら、加筆修正により精度が高められることを期待するものである。

(※1) 上妻博之編・花岡興輝校訂『肥後切支丹史 上巻・下巻』所収 エルビス 1989

(※2) 下田曲水編『暫定天草切支丹史』熊本図書館館友会 1941

おわりに

「年表」補訂するにあたり、以下の点に注意したことを付記する。

1. 年表の時期と記載内容について

年表は、1549年8月15日、イエズス会インド管区上長フランシスコ・ザビエルが鹿児島に到着したことより始め、1648年島原・天草の乱終結までを記載してある。内容は、熊本県に関することを中心に扱ったが、「フランシスコ・ザビエルの来日」や、「豊臣秀吉のバテレン追放令」「元和大殉教」など、キリシタン史上で特にターニングポイントとなる事柄については、採用してある。

2. 参考史料について

底本を作成した川本氏は、ルイス・フロイス『日本史』、レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』を利用している。また、一部を『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』により補填した。以下その特徴を述べる。

○『日本史』

イエズス会宣教師でリスボン生まれのフロイスが、1583年イエズス会日本準管区長ガスパル・コエリョの命で、ザビエル来日の1549年から1594年頃までを記した同時代の史料である。1597年長崎で没する直前まで取り組まれたが、公開を目的に執筆されたため記述も教化的内容で、回りくどい表現が多い。そのためヴァリニャーノより評価されなかった。

○『日本切支丹宗門史』

フランス人の日本研究者で、熱烈なカトリック信者であるパジェスによりパリで1860～70年に発刊。「イエズス会日本年報」などに依拠している。江戸時代初期の日本キリシタン史を編年的に書い

てあり、外交史を含め重要な記述は多いが、同時代の記述ではない100年以上後の編纂書であることを考慮に入れなければならない。

○『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』

イエズス会初代総長イグナティウス・デ・ロヨラは、東洋に派遣されたフランシスコ・ザビエル以来、定期的に「教化的」な報告を義務づけていた。1579年に来日した東インド巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノは、各地から送られてきた報告を一通の「年報」にまとめることを指示した。

「年報」が編まれる以前は、書簡として報告されていた。例えば、ザビエルが1549年8月15日、鹿児島に到着し、同年11月5日、その印象をゴアのイエズス会員宛に書き送った報告は「書簡」である。この書簡は、長文で、アンジローを案内役として、トーレス、J、フェルナンデスらと来日。鹿児島に一年あまり滞在し、平戸、山口を経て上京し、山口、豊後で布教を行ったことなどが述べてあり、一般によく知られている内容である。この書簡は、後にコーチンで書いた1552年1月29日付書簡と並んで「大書簡」と称されている（今回の「年表」では、この「大書簡」の内容も引用している）。これらの書簡や年報は、1598年、ポルトガルのエヴォラで出版され、同時代のヨーロッパ全域に広まった。

この「書簡」「年報」などをまとめたものが、松田毅一・川崎桃太両氏により『十六・十七世紀 イエズス会日本報告書』（全三期十五巻）として発刊された。ちなみに「書簡」「年報」は、多くの言語で発刊されているが、全ての書簡類や日本年報を一か国語で通読できるものは日本語だけである。

<参考資料>

山本博文「日本人の名誉心及び生死観と殉教」

『外国人が見た近世日本 日本人再発見』角川学芸出版 2009

3. 年号・月日に関する注意事項（重要）

最後にこの「年表」を見るための注意点を一つ述べることにする。

年表を見られて気づかれた方も多いと思うが、本「年表」は、宣教師等による記述で「太陽暦」（以下「洋暦」）を基本としており、和暦である「太陰太陽暦」（以下「和暦」）とは全く別の概念である。そのため一か月以上の差違があり、例えば1594年と天文18年は厳

密には同じではない。この違いは、通常の日本歴史を考える上ではあまり気にならないことも多いが、「洋暦」を使用する宣教師等の記述に関しては注意をすべきである。特に、「和暦」では、12月の記事は、「洋暦」では翌年になる。

一例を挙げてみるなら、徳川幕府のキリスト教禁止令は、「和暦」では慶長18年(1613)12月23日であるが、「年表」は「洋暦」を採用しているため1614年1月27日となる。今後この「年表」の精度を高めるためには、この差違を十分認識して作業を進めなければならない。

前述の『熊本藩年表稿』などの、出典が明らかな年表を利用することも「洋暦」と「和暦」の違いを理解するひとつの方法である。

熊本キリシタン史年表(稿)

フロイス「日本史」、レオン・バジェス「日本切支丹宗門史」、『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』

西 曆	和 曆	事 項	出 典
1549	天文 18	○8.15 フランシスコ・ザビエル、前年マラッカで会ったアンジロウ(パウロ)を案内役として、トーレス、ジョアン・フェルナンデスらと来日。アンジロウの生国の、鹿児島に到着。 ○11.5 アンジロウ(パウロ)が鹿児島よりゴアの学院のイエズス会修道士宛に書簡を送る。	日本報告集 3-1・42p
1551	天文 20	○9.29 コスメ・デ・トーレスが山口の市からインドのイエズス会修道士宛に書簡を送る。○10.20 トーレスが、山口の市より豊後のザビエル宛に書簡を送る。フェルナンデスが、山口よりザビエルに書簡を送る。○11.中旬 ザビエルが日本を去り、インドへ行く。	日本史 6・ 58 p 日本報告集 3-1・73p 83p 89p
1552	天文 21	○ルイス・デ・アルメイダがコスメ・デ・トーレスを訪れるため平戸から山口に行く。○9.7 バルタザール・ガーゴを上長としてペドロ・デ・アルカソバ修道士が豊後に入る。○10. ガーゴが、アルカソバを山口に派遣、数日後シルバ修道士、12月下旬ガーゴ、フェルナンデスが山口に入りミサを行う。	日本史 6・ 83 p 日本報告集 3-1・110p
1554	天文 23	○バルタザール・ガーゴ 府内から9里の非常に高い山の上にある朽網に行き260名の人に洗礼を行う。	日本史 6・ 111p
1555	弘治 1	○平戸にはおよそ500名のキリシタンがおり、領主はキリシタンなることに心を動かされ、埋葬するための土地を与えている。豊後では、領主より一地所を与えられ、そこに修道院と聖堂を建てた。教会には1500名のキリシタンがおり、毎日欠かさずミサと説教が行われ、日曜日には修道院に入りきれない。(ガーゴが、平戸よりインドおよびイエズス会の修道士宛に送った書簡)	日本報告集 3-1・180
1562	永禄 5	○ポルトガル船長マノエル・デ・メンドンサは、トルレスが平戸の下に行くとき、肥後国高瀬まで同行する。	日本史 6・ 303p

	事 項 の 追 記	出 典

西 暦	和 暦	事 項	出 典
1563	永禄6	○横瀬浦のキリタンが酷い迫害に…豊後にいたアルメイダ 修道士が横瀬浦へ行く。豊後から陸路4日の旅をして高瀬に着く。横瀬浦には9.20に到着。トルレスが高瀬に赴く。川尻にシルヴァ修道士…高瀬で没。	日本史9・98 p
1564	永禄7	○11. フロイス、島原より肥後国高瀬に赴く。そこで幾人かのキリタンを見いだす。滞在する時間が無く、翌日豊後国へと陸路4日を要する道が続けて行く。	日本史第29章
1570	元亀1	○ルイス・デ・アルメイダは、ジョアン・パプテスタと11月の始め越冬するために口之津より豊後に向かう。高瀬にてパプテスタと別れる日田に向かう。	日本史7・66 p
		○アルメイダは日田にて、豊後国主を訪問して、デウスを庇護する天草殿を擁護する四通の書状を作成するよう希望。○トーレス過労のため天草の志岐にて没する。	日本史7・66 p
1571	元亀2	○日本布教長フランシスコ・カブラルが京に、数日後 フロイス、日本人の修道士ロレンソとジョアン・デ・トルレスを伴い岐阜の信長に会う。	日本史2・263 p
1573	天正1	○4. 信長の上京焼失	日本史2・p
1574	天正2	○高山ジュスト右近について	日本史2・300 p
1575	天正3	○都に最初の被昇天の聖母教会が建てられる。	日本史2・300 p
1587	天正15	○副管区長(カサバル・コリュ)、フロイスが肥後八代に赴き、九州征伐の関白を訪問。八代は島津が支配していたが敗走1.5~2万が率に。伴天連が助命を願い全員釈放、投獄されていた人の中に、肥後国の主だった殿・赤星殿…理解できたら洗札に関白・川内で陣を⇒島津義久が降伏、関白・博多に行く。	日本史12・11 p
		○関白自身がキリタン宗団に対し非常に好意的で、毎日のように(高山)ジュスト右近殿と(小西)アゴスチイノ弥九郎を取り立て、家族の一員のように引き立て大きな信頼を置いている。	日本報告集3-7・165p

	事項の追記	出典

西 暦	和 暦	事 項	出 典
1587	天正 15	○副管区長 (ガスパル・コエリユ) フロイスが博多の関白を訪問。関白は極めて好意的だった。家臣の洗礼が相次いだ。	日本史 12・22 p
		○豊後国衆の一人志賀殿 (ドン・パウロ) は、豊後に叛いた一万田殿の城を包囲したとき、中に籠もる島津勢で天草五人衆の一人天草領主ドン・ジョアンがいることを知り、同じキリシタンであることから助ける。この縁で、ジョアンの従兄弟である大矢野殿がキリシタンとなった (ジャコメ)。	日本報告集 3-7・180p 233p
		○関白殿は、博多にいたとき副官区長に大いなる榮譽と好意を示していたが、平戸にいたポルトガル船を見たいと欲したがかなわぬことに激怒して、キリシタン宗団に対し、今まで受けてきたどの迫害よりも大きい全般的な迫害が発動された。その夜の内に、ジュスト右近殿の身分を剥奪して追放し、日本のキリシタン宗団全体を解体することを決め、全ての司祭と修道士は 20 日以内に日本を撤去することを命じる。〈パテレン追放令〉	日本報告集 3-7・193p
		○7.22 高山右近が副管区長 (ガスパル・コエリユ) に話した…迫害の様子 ○7.24 関白は何の予告無く、突如高山右近を追放=キリシタン宗団の最大の支柱から攻撃し、キリシタン宗団に対する悪口、讒言を言う。 ○7.25 伴天連追放令。	日本史 12・37 p
		○8. 細川ガラシアが、パードレ・セスベデスの許可を受け、マリアより受洗する。	日本報告集 3-7・230p
		○関白が高山右近を追放したこと、および彼が信仰と徳操について英雄的な模範を示す。	日本史 5・40p 日本報告集 3-7・198p
		○凄まじい怒りに燃え立った関白が教会、司祭、キリシタン宗門に対し命じたこと…司祭等の日本に来る事を禁ず、20日迄退去、改宗せぬ武士は死かマカに追放、財産の没収・長崎と浦上の直轄などについての記述。	日本史 5・48 p

	事項の追記	出典

西 曆	和 曆	事 項	出 典
1587	天正 15	○天草領主ドン・ジョアンは、信仰の固さを示すとともに、天草からドン・バルトロメウを長崎に派遣し、有馬殿と大村殿が転向したかどうかを調べさせる。	日本報告集 3-7・218p
		○細川ガラシアの二番目の子（細川興秋）が、マリアより受洗し、ジョアンと名付けられる。○戦から帰った越中殿（細川忠興）キリシタンの乳母の一人を些細なことで捕らえ、その耳と鼻を切り落として外に追い出す。その後、別の二人の髪を切り、三人ともキリシタンであるため暇を出した。	日本報告集 3-7・231p 日本史 4・
		○関白が博多から大阪に帰った後にキリシタンの潜伏がわかる。	日本史 4・ 176 p
1588	天正 16	○3.3 オルガソティノ書状、「関白の司祭追放は巖なるもの。聚楽第建設、お金と欲情に卑劣で下品。」	日本史 4・ 191 p
		○5.14 聚楽第に後陽成天皇を招く。○関白は、肥後の国を与えていた佐々陸奥守を堺に召還した、彼は異教徒であったが、キリシタンを援助しようと決心していた。関白は、何の過ちもないのに殺そうとして屋敷を包囲したので、彼は切腹し絶命した。○暴君（関白）は、佐々の後、肥後国を、堺の代官（小西）ジョウチン立佐の息子アゴスチノ弥九郎（行長）殿と、悪逆で、我ら、並びにキリスト教の名における敵である、法華宗徒の（加藤）虎之助と称する異教徒に、それぞれ半国ずつあてがう。○高山右近を父母妻子ともども加賀に移す。	日本史 4・ 201 p
1590	天正 18	○肥後国の半ばはアゴスチノ（小西行長）が所有し、娘婿の対馬国主（宗義智）は、キリシタンとなる。	日本史 4・
		○兵士達が朝鮮に渡った後、関白が肥前名護屋に滞在中、薩摩の梅北国兼が肥後国に侵入。浅野弾正が派遣される。このとき栖本殿と称する天草のキリシタンが謀反人と見なされていたが、アゴスチノの代理人である（結城）ジョルジ弥平次は、万事善処し事なきを得る。	日本史 4・

	事項の追記	出典

西 曆	和 曆	事 項	出 典
1593	文禄 2	○モレイラ師が、豊後国より肥後国に行き、(小西) アゴスチノの所領である矢部城を訪れる。	日本史第 69 章
1600	慶長 5	○ドン・アゴスチノに属する志岐と、天草の島では、当時司教のいた志岐の駐在所と付属した伝道所があって、6 人の司祭と 10 人の修士がいた。國中あげてキリシタンで、他国の者 300 人が洗礼を受け、諸方の伝道所のある所に新しい 7 つの天主堂が建立された。しかも山間に散在する天主堂は 46 カ所もあり、これを歴訪することは 2 人の宣教師にとって容易ではなかった。	宗門史上・38p
		○ドン・アゴスチノの本領肥後で、宇土の大駐在所に、いくつかの伝道所が付属していて、5 人の司祭と 7 人の修士がいた。すでに 1 万人の信者がいたが、さらに 1 万 7 千人の新受洗者がでた。	宗門史上・38p
		○ドン・アゴスチノの甥チューエモンドノ(忠右衛門殿)は、17 歳の青年で、領内一帯、特に隈ノ庄の住民全部を改宗し、3 千人の受洗者があった。チューエモンドノは仏僧たちに、キリシタンになるか立ち退くかを選ばせ、6 人は改宗したが、他者は退いた。	宗門史上・38p
		○八代と野津には、ドン・アウグスチノの家老ヤコボ美作(小西)の命で新たに 14 の天主台ができた。	宗門史上・39p
		○アウグスチノの家職(オフィシエ)ジョルジオ・ヤフィンジドノ(弥平次)の治めていた矢部では、新たに洗礼を受けた者が 1500 名いた。	宗門史上・39p
		○天草・志岐を合わせ 10 万人…加藤清正に攻められる。	宗門史上・38p
		○既に肥後半カ国の領主・主計殿(加藤清正)は、アウグスチノ(小西行長)に属していた他の半ヶ国を攻めて、その城下宇土を囲んだ。籠城者には 2 人の司祭と 3 人の修士と若干の伝道士がいた。主計は調停役として宣教師を利用しようとしたが、断られる。	宗門史上・47p

	事項の追記	出典

西 暦	和 暦	事 項	出 典
1600	慶長 5	○アウグスチノの領内には、天草や志岐の島も含めて10万人のキリシタンがいた。領内には7カ所のイエズス会駐在所があった。	宗門史上・49p
1601	慶長 6	○肥後の信者は戦慄すべき迫害に遭う。アウグスチノの所領も合わせ持った清正は、キリスト教の敵であることを名乗り出、いかなる宣教師も領内に住むことを禁じ、家臣に転び証文に署名することを命じる。転んだ者もいたが、そうでない者に対し奉行たちは、夥しい書類を偽造した。清正のキリシタン対策は、極端に痛い目にあわせるか、食糧責めを行い、領外に出ることを禁じた。	宗門史上・74p
1602	慶長 7	○肥後のキリシタンの役人達は、衣食にも事欠き、家族と共に藁屋根の下で日を送る。その苦しみは一通りではなかった。迫害は6カ月続いたが、殉教者を出すことを恐れた主計殿は、国外に出ることを認めた。キリシタンの多くは長崎へ移った。	宗門史上・87p
1603	慶長 8	○主計殿の領地肥後の国には司祭は一人もいなかった。	宗門史上・104p
		○清正は、熊本城下で再び迫害を始めた。そこには多数のキリシタンがいて、城下から追放し荒野に放った。この新たな伝道者達の忍耐は迫害に勝ち、彼らの生き生きした説教は功を奏し、夥しい改宗を促した。確信の足りない改宗者は、心の中では、信仰を守っていたが、表向き棄教した者もいた。ヨハネ他キリシタンが熊本・八代で処刑される。	宗門史上・108～125p
1604	慶長 9	○家康は生来穏健…慎重に改宗や教会の管理を行う。長崎は、キリシタンであるアントニオ村山(東安)に統治を一任され、全町あげてキリシタンであった。	宗門史上・132p
		○ドン・アゴスチノ(小西)の存命中天草・志岐・神津浦(上津浦)のキリシタンは、寺沢志摩守の迫害を受けた。天草と志岐の宣教師等の伝道所に接続した二カ所の外、天主堂を破却し十字架を打ち倒した。	宗門史上・136p

	事項の追記	出典

西 曆	和 曆	事 項	出 典
1604	慶長 9	○(188名の列福の内容)八代の3人の慈悲役 ヨハネ・渡辺・ミカエル・三石・ヨハネ服部。信者で通した13人。	宗門史上・138p
1605	慶長 10	○八代の3人の慈悲役 ヨハネ・渡辺・ミカエル・三石・ヨハネ服部、投獄される。	宗門史上・152p
		○(188名の列福の内容)八代の3人の慈悲役は、独房の狭い不潔な極めて劣悪な環境で苦しむ。	宗門史上・157p
1606	慶長 11	○(188名の列福の内容)八代の3人の慈悲役のこと。ヨハネ・渡辺死去。	宗門史上・183p
1607	慶長 12	○(188名の列福の内容)八代の3人の慈悲役のこと。ヨハネは、年若く体が弱い妻を気に病み、死病にとりつかれ食事をしない日もあった。そのためデ・パエザ師は、体に気をつけるように勧めた。	宗門史上・200p
1609	慶長 14	○イエズス会宣教師のフランシスコ・カブラル、オルガンチノ・グネッシ(ソルヂ)、フランシスコ・デ・バイバが、それぞれゴア・長崎・大坂でそれぞれ死去。	宗門史上・223p
		○(188名の列福の内容)八代の2人(ヨハネ、ミカエル)の慈悲役の殉教。肥後の教会は別として、どの教会も皆平和であった。	宗門史上・225p
1612	慶長 17	○寺沢志摩殿の所領の志岐、神津浦(上津浦)の島々には、司祭・修士が各々一人づついた。領内の人数が減らないように宣教師をとどめていた。	宗門史上・288p
		○肥後では迫害は猛烈で、加藤清正の後を継いだ忠広の後見人達は厳格に対応。サンギザカ、ウカヅチ、オカノは追放される。	宗門史上・288p
1614	慶長 19	○1.27 禁教令。京都のキリタン名簿登録。7000人以上だったが4000人登録。修道者全員長崎へ行く。	宗門史上・325p
		○11.20 ミカエル・アカフォシ(赤星)肥後の田底の人、19歳。武家の出身。戦いで捕虜となり有馬の商人に売られた イエスのために一苦勞したい希望に燃え、刑場に駆けつけ、他の者と同様斬首。	宗門史上・378p

	事項の追記	出典

西 暦	和 暦	事 項	出 典
1614	慶長 19	○11.23 士分の赤星太郎兵衛(ジョジュム) 肥後・隈府の人で64歳。国内の位は第2・3位であったが、加藤清正はその能力を惜しみ、キリシタンであることを放任。清正没後、忠広の家老により追放。寺沢志摩守が引き取ったが、その後口之津で斬首。	宗門史上・365・383p
1615	元和 1	○肥後では、慶長16年清正が死んで、15歳の加藤忠広が継いだ後、いきなり殉教者を出した…城内の大工棟梁バウロ・ジャソダジョー(八十太夫)。	宗門史上・403p
1615	元和 2	○9.17 肥後八代生まれのイエズス会の修士バウロ・レイオンが、マニラで死去(64)。	宗門史上・389p
1617	元和 3	○キリシタン達は、かかる迫害にも屈せずこの年800人受洗。有馬の宣教師達は大いに用心し、肥後の各地や志岐、天草、神津浦(上津浦)の諸島を歴訪した。ここには多くのキリシタンがいた。特に八代で迫害が厳しく多数のキリシタンが追放。	宗門史中・19p
1620	元和 6	○有馬の神父たちが肥後や薩摩を訪問した。	宗門史中・132p
1621	元和 7	○長崎で逮捕されたキリシタンの隣人に対し、伝道師トマス・アカソシ(赤星)は大村に遣わされる。…肥後の要市の人。もと侍の子で勇敢な侍であった。1600年受洗後、マニラから帰還。要市…『日本都市生活史料』(三一書房・1978年)・文献概要 第6巻 港町篇(1) 1. 高瀬寿平大万帳(p36～p160) 肥後米の主要積出港である高瀬港が所在する城北の要市、肥後国玉名郡高瀬町の町奉行高瀬寿平の往復文書公式万控帳で、弘化5年から嘉永元年1年間の記録。	宗門史中・173p
1622	元和 8	○<元和大殉教>スピノラ神父、肥後の伝道師トマス・アカソシ(赤星)(50)らキリシタン55名を処刑。1597年の26聖人の殉教の場所から150歩の所であった。宣教師をかくまった宿主30人斬首。宣教師25人火刑。日本人初の司祭セバスチャン・木村神父も含まれる。	宗門史中・229・233p

	事項の追記	出典

西 曆	和 曆	事 項	出 典
1622	元和 8	○1619年殉教したヨハネ・シューワ (秋雲)の寡婦肥後の人マリヤ斬首 (38)。マリヤとアポロニヤに連座。	宗門史中・ 234p
		○朝鮮人アトニオの妻マリヤ(肥後の人)・ ヨハネ(12歳)・ベテロ(3歳)斬首。	宗門史中・ 234p
		○肥後の人ド'ニコ・ヤンダ(34)・妻 カラ連座により斬首。	宗門史中・ 235p
		○肥後の人寡婦カタリナ(48)連 座により斬首。首は、切られてから、 イエズスとマリヤの聖名を唱へながら三 度はねかへった。	宗門史中・ 235p
		○イエズス会のガスパル・デ・カストロ師肥 後訪問。	宗門史中・ 274p
1623	元和 9	○イエズス会司祭ジ'ロモ・デ・アソビ リス師と共に名乗り出た修道士シモン・ エボ(遠甫)…12・4 江戸で火あ ぶりの刑(43歳)肥後の野津(Nozu) (八代郡氷川町野津?)の生まれ、 お寺の小僧であったが首席がキリシ タンになったことで16歳に洗礼 18歳に伝道師 1614年マニラに追 放、翌年帰還 デ・アソビリス師と共 に20年旅	宗門史中・ 289p 日本報告集 2-3・208p・225p
		○イエズス会の二人の神父は、天草島 に滞在して、1年に二三次、肥後 を巡回。	宗門史中・ 300p
1624	寛永元 年	○10.7 迫害中に転んだ商人ルイス・ロ ケモン(六右衛門)と妻マリヤと従僕が大 矢野の島で処刑。3人共八代の近く鏡 で生まれた(八代市鏡町)。ルイスは 死ぬ3時間前に洗礼を授けられた。	宗門史中・ 337p
1625	寛永 2	○背教者末次平蔵に治められていた 長崎には、イエズス会の司祭20 名、修士4名がおり、まだ一番安 全な場所であった。	宗門史下・ 6p
1626	寛永 3	○2人の神父が天草に旅をした、 もう一人他の神父は、肥後を訪ね た。この地方のキリシタン達は、大矢野 島に行つて告解、聖体を拝領。	宗門史下・ 46p
1627	寛永 4	○水野河内守守信・長崎首席奉行 の暴威・拷問。島原の領主・松倉 豊後守重政の島原での暴威・拷問。	宗門史下・ 61p

	事項の追記	出典

西 曆	和 曆	事 項	出 典
1628	寛永 5	○12・25 15年間伝道士をした肥後のイエズス会の平修士ミカエル・ナシマ(中島)、自宅で1年・長崎・島原で監禁の後、雲仙岳で殉教。	宗門史下・103p
1630	寛永 7	○肥後でイエズス会の神父の伝道士トマス・サンが、その子等の目の前で領主の手で斬首。	宗門史下・160p
		○10.29 長崎でデ・イエゴ・ナカシ・ケヨーエが火あぶり。母マリア(65)も斬首。マリアは、肥後のマシアイ(松合)(宇城市不知火町松合?)の生まれ。12・2 デ・イエゴの子4人死刑。デ・イエゴの妻の父も斬首。全家族の中デ・イエゴの妻だけが生き残る。	宗門史下・173p
1632	寛永 9	○2.6 熊本でペトロ・インダ・シロエソ(七郎右衛門)牢死 8/8 熊本で2名斬首 バルトロメオ・ナカハラ(中村)、子ルイス	宗門史下・210p
		○将軍により肥後の領主加藤廣忠追放、ドンナ・ガラシヤの子、越中殿細川忠利に与えた。忠利は既に長年、デ・セバデス神父を城中におき、事故がなければ受洗したであろう。	宗門史下・225p
1638	寛永 15	○4.15 島原・天草の乱終わる。	宗門史下・829p

【凡例】 この年表は熊本キリシタン史研究会が、熊本県キリシタン史研究の基礎史料として作成したもので、元年表は会員の川本實が作成した。今後更に年表の精度を高めていきたい。

	事項の追記	出典

発行者 熊本市島崎2丁目10-11
カトリック島崎教会内
熊本キリシタン史研究会 今村克彦
編集責任者 伊津野拓也



熊本キリシタン史研究会